

南米にルーツを持つニューカマー第二世代の青年期 (2)

——ペルーにルーツを持つ女性を中心に——

The Adolescence of the Second Generation of New Comers
from South American Countries in Japan

角替 弘規

静岡県立大学食品栄養科学部栄養生命科学科
(執筆時：桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)

(2016年3月28日 受理)

1. はじめに

本研究は、1980年代後半から日本社会において増加しつつある、いわゆるニューカマーと称される外国人の第二世代に着目し、かれらが日本で生活する中でどのように適応しているのかを明らかにしようとするものである。筆者は本研究に先立って南米にルーツを持つ第二世代の男性についてインタビュー調査を行ったが(角替2015)、そこにおいて男性に限定したのは、ニューカマー第二世代の日本社会への適応を分析するにあたって、ジェンダーバイアスを排除しようとしたためである。そこで本研究では同じ南米にルーツを持つ女性を対象とし、調査分析を行った。

外国人が日本社会に適応するにあたっては、言語の習得や文化習慣の相違の克服といった様々な困難を経験するが、学齢期に保護者とともに来日したり日本で生まれた子どもについても、成人外国人とは異なる適応の難しさがあると思われる。もちろん、出身国あるいはルーツとなる国や地域の違いによって、経験する困難も異なると思われるが、本研究の

目的の一つは、ペルーにルーツを持つことが彼女たちの適応過程にどのような特徴をもたらすことになるのかを明らかにすることにある。また、現在青年期にあるニューカマー第二世代の地位達成がどのような様態を示すのかについて、日本社会における事例に関する研究蓄積はそれほど多くないように思われることから、本稿ではペルーにルーツを持つ女性の入国に至る経緯、家族形態、文化や価値観、そして来日後に利用しうる資源を明らかにすることで、ペルーにルーツを持つ第二世代の女性の地位達成の特徴を見出そうとするものである。

さらにこれまでニューカマーに関する調査研究を行ってきた経験上、女性の場合には地位達成に関してジェンダー面から男性とは異なる影響を受けていることが推察されることから、今回の調査においても、女性であることが日本において経験する葛藤や困難に注目しながら、ジェンダーが地位達成に与える影響について検討する。

分析に当たってはPortesらの提唱する分節的同化理論を参考にした(Portes & Rumbaut 2001)。分節的同化理論は、1960年代

表 調査対象者一覧 (1)

	年齢	生誕地 (来日年齢)	本人国籍	最終学歴	現在の職業	親の学歴	第一言語
P1	26	ペルー (14歳)	ペルー (定住)	専門卒	無職 (求職中)	父：未確認 母：専門卒	日本語
P2	34	ペルー (12歳)	ペルー (永住)	専門卒	美容師	父：高卒 母：大学中退	日本語
P3	26	ペルー (3歳)	日本 (永住→帰化 26歳)	高卒	パート職員 (工場勤務)	父：大卒 母：未確認	スペイン語
P4	22	ペルー (生後8か月)	ペルー (永住)	専門卒	看護師	父：専門卒 母：専門卒	日本語
P5	28	ペルー (10歳)	ペルー (永住)	専門卒	美容師	父母：不明兄 姉：大卒	日本語
P6	31	ペルー (10歳)	日本 (帰化20歳)	大卒	高校非常勤 講師	父：大卒 母：大卒	日本語
P7	24	ペルー (5歳)	日本(永住→ 帰化21歳)	大卒	派遣社員 (貿易会社)	父：大学中退 母：専門卒	日本語

以降多様な移民が流入する中で、アメリカ社会における階層化が一層進行する中で、移民たちの地位達成がどのようになされ、移民が社会階層のどこに位置づくのか、そしてその位置取りを決定する要因は何かを明らかにしようとするものである。そしてそのプロセスの中で重視されるのは第1世代の人的資本と編入様式、すなわち政府がいかなる移民政策をとるのか、社会が移民をどのような文脈で受け入れるのか、エスニックコミュニティがあるかどうかといった要素である。こうした様々な要因が移民親子の文化変容に違いをもたらし、地位達成の相違を生むと考えられている。

現代アメリカ社会を前提とした分節的同化理論をそのまま日本社会に適用することが難しいものの、Portesらが着目する移民政策や社会における受入れ文脈さらにはエスニックコミュニティの存在といった要因を慎重に検討することによって、日本社会におけるニューカマー第二世代の地位達成の特徴を描き

出すことが可能であると考えられる。

また、本研究はエスニシティとジェンダーに関わる研究動向をまとめた伊藤(1995)の指摘に基づいて、エスニック文化の維持における女性の役割についても考察する。Espiritu(2003)がエスニック文化の維持における母娘関係の重要性について指摘しているように、親子特に母娘関係のあり方が地位達成のみならず文化継承に対しても何らかの影響を及ぼしていると考えられるのである。

以上のことから、本論文では下記のリサーチクエスションを検討する。

- ① ペルー系第二世代の女性たちの母娘関係はどのようなものであるか。
- ② ペルー系第二世代の女性たちは母親をはじめとする第一世代からいかなる文化を継承しているか。
- ③ 親の人的資本と編入様式は、ペルー系第二世代の女性たちの文化継承と地位達成にどのような影響を与えているのか。

表 調査対象者一覧(2)

母国語	親子言語	婚姻 (パートナー)	親との交流	義務教育経験 学校楽しい／先生に面倒を もらった	現在の 自己定義
聞く読む：よくできる 話す書く：まあできる	スペイン語	事実婚 (日本人)	良好 (別居)	○／◎	ペルー人
聞読話：よくできる 書く：あまりできない	スペイン語と 日本語	既婚 (日本人)	良好 (別居)	○／○	ペルー人
よくできる	スペイン語	独身	良好 (同居)	○／◎	ペルー人
聞く：よくできる 読話書：まあできる	スペイン語と 日本語	独身	良好 (別居)	○／小○中△	ペルー人
まあできる	スペイン語と 日本語	独身	良好でない (別居)	小△中○／△	ペルー人
よくできる	スペイン語	既婚 (ブラジル人)	良好 (別居)	◎／◎	ペルー人
聞く話す：よくできる 読む書く：まあできる	スペイン語	事実婚 (日本人)	良好でない (別居)	◎／小○中×	ペルー人

2. 調査対象者

ペルーにルーツを持つ22歳から34歳の青年期の女性7名に対し半構造化インタビューを実施した。7名全員がペルー生まれの1.5世であり、5名が親の出稼ぎによる来日、1名が国際結婚による呼び寄せ、1名が両親との死別を契機とした来日である。全員、両親あるいはいずれかの親が日系人である(上記表参照)。

3. 母娘関係—親の権威の維持

今回の調査を通して明らかとなったのは、ペルー系家族においては母娘関係を通じて親の権威が維持されているということである。ここで注意したいのは、親の権威が維持されているからと言って、母娘関係が必ずしも良好な関係にあるということではない。母娘関係が良好な場合であっても、良好ではない場

合であっても、子世代は親世代に一定の権威を認め、親から与えられる家事役割に従順に従っていた。

アメリカ社会におけるラテン系(キューバ系、メキシコ系、プエルトリコ系)の移民家族について分析したクロケットら(Crockett & Russell, 2013)は、各エスニシティ間における差異を認めつつも、ラテン系家族に共通する価値観として個人主義(personalism)をベースとした家族主義(familismo)の存在を指摘している。ここでの個人主義はすべての行為の基準を個々人の価値観に置くということではなく、むしろ他者を思いやり、相手との関係における信頼と温かさを重視するものである。したがってこの個人主義から導かれるのはその個人が所属する集団や家族のニーズを満たすための行為であるとされている(p.83)。

さらにクロケットら(同)はラテン系家族における子育てに特に重視される価値は「尊敬」(respeto)であり、母親は子どもが権威

に従い適切な態度をとるように躰けることを強く求められていると指摘する。こうした文化的価値を背景としながら、ラテン系の家族では男子により高い自由度と移動性を認めるのに対し、女子は親からの監督が強く、その活動範囲も狭められているとされる(p.84)。

このようにラテン系家族においては、父母への尊敬を一つの価値基準とし、利他的な配慮を重視した個人主義に基づく家族主義をベースに、女子に対する親からの監督が強く働く傾向にあり、娘たちに家事役割に対する期待が課せられているとみることができる。

今回の調査対象となったペルー系二世代の女性の語りの中で対象者全員が共通して語っていたのは、彼女たちが子ども時代から家事役割を担っており、それらの役割を表面的には従順に受け入れていたという経験である。こうした経験は角替（前掲）において示された南米系男性の事例ではほとんど語られなかったことに照らせば、ペルー系家族においては家事役割の遂行が女子に対してより強く課せられることを窺わせるものである。

その語りを見ると、彼女たちが担う家事役割が共働きの両親を支え、弟や妹の養育を行っていくうえで欠かせないものであることが示唆されており、彼女たちが好むと好まざるとに関わらず、家族の中で担うべき役割として受け入れざるを得なかったことが語られている。そこに示されるのは、子ども自身の希望とは関係なく、尊敬すべきとされる父母の意向を満たすために家事役割を引き受けている姿である。

P4 保育園の送り迎えとか、嫌でしたね。それでも、学校の行事とか、三者面談とか、そういうのは親が行っていたんです。通訳で行ったりとかはあったけど、親ができることはやっていました。ただ、送り迎えとかそういうのは、私がやっていました。

— それは、やっぱりお父さんお母さんは仕事があるから、P4さん……

P4 もうやる人が私しかいないから。

— しかいないから。じゃあ、もう家族の役割としてそうなった。

P4 そうですね。

(2015年6月2日インタビュー)

子どもに家事役割が与えられるのは、両親の就労時間の長さや就労形態といった現実的な事情に加えて、親が物理的な強制力を持って子どもに役割を与えているという実態もうかがえる。例えばP7の親は時には暴力的な態度をとることで子どもの抵抗の機会を奪い、それを受けてP7も親に対して抵抗することをあきらめ、従順に従う「いい子」を装っていたと語っている。

P7 私は、お母さんがすごく気の強い人で、全く抵抗できなかったので、(母親に反抗したことは)ないですね。逆に、(抵抗するようになったのは)大きくなってからです。言われたことは聞いたり、宿題をちゃんとやったり、自分で言うのもあれですけど、ちゃんといいい子でした。

— なるほどなるほど。怖いんだ。

P7 そうですね。お母さんが結構すぐ怒鳴ったり殴ったりするから。

(2015年7月4日インタビュー)

こうした母娘関係は、実母と実娘との関係性においてだけでなく、年齢差のある姉妹間においても認められた。実母との死別を契機に年齢の離れた姉の家庭に引き取られ養育されていたP5は、姉に引き取られた段階から家事の一切を課されることとなった。彼女が家事役割を引き受けた背景には、生まれ育った家族とは違う感覚と「養育されている」ということへの気遣いといったメンタリティが作用していたとみられるが、姉自身はP5のそうした気持ちを汲むのではなく、むしろP5が家事役割を引き受けて当然と見ていたようである。姉家族にはP5と同年齢の姉の息子が同居していたが、彼に対して家事役割

が与えられることはほとんどなく、P5もそれについて不満に感じつつも姉の言われるままに家事を行っていたと語る。そうした姉との関係は良好ではなかったと回想されている。

P5 (姉との) 仲が悪かった。嫌いだった。

— そうなんだ。

— (姉が) 親面するから? 厳しかったの?

P5 いや、私には厳しいとか、多分、娘ではないから手を出せないっていうのはあったんだと思うんですよ。それも自分も分かっていたし。ただ、家のことをすごい頼まれていたんです。

— そうそう。ちびたちの面倒とかもね。

P5 そう。で、従弟は、自分の子どもなのに何もしないみたいな。で、私が全部やる。お弁当も作るし、家の掃除もやるし、洗濯もするし、姪の送り迎えもするし。でも、学校もあって、勉強もあって、部活もあって、門限もあるみたいな。

— 全部と。

P5 となって、いっぱいいっぱいになった。

— では、もう(家から)出たくて出たくてもう。

P5 はい。

(2015年6月22日インタビュー)

親世代はこうした子供の役割遂行について、子どもとして担うべき当然の役割であると見なしている節もうかがえる。P4はある通訳での場面で正確に通訳ができなかったことについて親から注意される中で次のような言葉を投げかけられたと語っている。

P4 親が伝えてほしいことをうまく伝えられないとか、相手が言っていることを伝えられなくて、「おまえのほうが日本にいて、日本語も話せるのに何でできないんだ」とか。

— そうとも言われてしまうんだ。

P4 そう言うし、「何で親を助けようとしなくて」みたいな、そういうのは言われました。

(2015年6月2日インタビュー)

以上のように、娘たちにとっての母親は家事役割を賦課する抑圧的な存在としてあるのだが、娘たちは子どもたちの養育のために母親が苦労を重ねて働き続けていることに対して尊敬の念も抱いている。P7は母親が示す価値観に対して相容れない態度を持ちつつも、学校卒業後に工場でのアルバイトを経験した際に、その作業が自分の母親が経験してきた作業とほぼ同じ事に気が付き「よくこんなところで働けたなと思って本当に尊敬しました」と語っている(2015年7月4日インタビュー)。ペルー系家族における親世代の権威はこうした親世代の厳しい就労に裏打ちされていると考えることができる。子どもの養育や家計の維持に苦心する父母を目の当たりにした娘たちは、そうした親に対して反抗する手段を持ちえず、個人的な感情としては複雑な葛藤を抱えつつもその役割を遂行していると見ることができる。

4. 家族主義的価値観の継承と価値の選択

では親に対する権威が保持されている中で彼女たちにはどのような文化継承が行われているのだろうか。スペイン語と宗教的行為に関してみるとそれらの継承が限定的であることがうかがえる。

調査対象者全員が母国語となるスペイン語を保持しており、親とのコミュニケーションにおいてはスペイン語が主に用いられていた。また幼少期に親の方針でスペイン語を維持するためにペルーの通信教材を用いて学習したり、スペイン語教室に通わされている場合も見受けられた(P3、P4)。こうした言語継承の努力がなされているにもかかわらず、日本での生活が続く中で次第にスペイン語が忘れられてしまっている場合や、子世代が保持しているスペイン語では親に複雑な意思伝達するには不十分であることが表明されている。

本当に、やっぱり幼い頃に来ているので、幼いときの言葉しか分からないっていうのもあって、正しい、上の方、日本語は、あんまりそういうのはないんですけど、上の方とどうやってスペイン語でしゃべるのかって、そのところも忘れてしまっていて。友達もみんな日本人ですし、「どうしようね」っていうのもあったりして。職場もみんな日本人です。

(P1、2015年2月19日インタビュー)

— スペイン語の雑誌とか新聞を読むことはできますか。

P2 できます。でも、小学校六年生で来ているので、表現力も小学生が話している感じですよ。それも同じように、病気だったり、専門用語、スペイン語の病気と言われても、どちらも分かりません。日本語で言われても分からないし、親に説明したくても分からない。

(2015年2月20日インタビュー)

したがって、将来の自分の生活にスペイン語が必要であると考えられる場合には、学校などの家族以外の場において学習していた。例えば高校生時代に将来スペイン語の教師になることを目指したP5は、国際科のある高校に進学し、そこで改めてスペイン語を学びなおしていた。

言語の継承と同様に、親世代から子世代への継承が限定的になっていると思われるのが、宗教活動へのコミットメントであった。調査対象者全員がキリスト教系の信仰を持つことを表明しているものの、7名中6名はミサへの出席など積極的な宗教活動への参加は行っていなかった。また、宗教を身近に感じるかという問いに対して、「身近に感じる」と答えた者は7名中1名に限られ、ほとんどは「それほど身近に感じていない」と回答している。親世代の方が信仰心が強く具体的な行動も見られるようであるが、子世代においてはそれに倣って自らの信仰を深めようという姿勢はほとんど見受けられなかった。

むしろ親から信仰の強制が行われなかったことを評価していたケースもあった。P5は日曜日に行われるミサへの参加を親から強いられなかったことにより、学校での部活動への参加が円滑になり、それによって学校生活にうまくなじむことができたとして親のそうした姿勢を高く評価していた。

文化継承を支える重要な資源としてポルテスら (Portes & Rumbaut, 2001) が指摘していたのはエスニック・コミュニティの存在であった。中でも強調されていたのは移民の経済的・職業的達成よりもメンバー同士の絆である (p.65)。たとえ経済的に恵まれないコミュニティであってもメンバー間に緊密な関係が形成されていれば、子世代の監督や達成を促してくれるとしている。

この点について調査対象者の在日ペルー人コミュニティとの接触状況を見てみると、彼女たちと在日ペルー人コミュニティとの接触が調査対象者やその家族と非常に緊密な関係を構築しているようなケースは少なかった。P2はペルーに在住していた頃から、ペルー人との関わりよりも日系人との関係の方が密接であったと回顧し、現在においても日系人コミュニティとの関係があるとしているが、そのかわり方はとても緩やかな関係であるとしている。彼女は日系人コミュニティについて「友達というより家族みたいな感じですよ。親戚みたいな」(2015年2月20日インタビュー)としつつも、そのコミュニティに参加したことで言語的な支援を受けたり、信仰上何らかの影響を受けたという経験は語らなかった。日系人コミュニティに対する親近感が示される一方で、在日ペルー人コミュニティに対してはコミュニティとの距離が強調された。ここで注目したいのは距離感が強調されるコミュニティは親世代が所属するコミュニティであるという点である。

距離がある。人によるんですよ。私みたいに日本で育って日本の社会にも入り、つながっている人たちとは、また違う会話ができ

るんですけど、日本で勉強を受けてない、出稼ぎだけに来たコミュニティーには入れないなって。

(P6、2015年6月26日インタビュー)

P7 でも、お母さんがいたR市のほうの集まりは、ただばか騒ぎしたい感じの方ばかりで。多分、年齢も違うし、お母さんの世代だから、お母さんの世代は楽しい。

— その辺はちょっと違う？

P7 そう。

(2015年7月4日インタビュー)

こうした距離感の背景には自分との経験の違いであったり、「価値観」や「ノリ」の違いが存在している。さらにコミュニティの集まりは一時的で緩やかなものであり、彼女たちの生活上の困難を支えるといった質のものではなかった。したがって、文化継承においてペルー系エスニック・コミュニティが果たす役割も非常に限定的なものと考えられる。

スペイン語や宗教に関する文化継承が限定的である中で、親世代から子世代、特に母娘間で継承されるのは、家事役割の遂行も含めた家族主義的価値観であると思われる。そこには単に家事や育児を担う女性としての立場性の継承のみならず、妻としての役割や価値観の継承も含まれている。日常的な母親とのやり取りの中で、母親世代の家族や夫婦関係についての価値観が伝えられている。

例えばP2の母親は日本—ペルー間の行き来において夫と行動をともにすることについて「パパと結婚した以上、パパに付いていかなければならない」、「パパが行くなら、ママも行くのが普通でしょう」という考え方を示していた。またP2が夫の実家との関係について悩んでいる際には、「ママは好きで日本に来たわけではないんだから、あなたもちゃんとL市(夫の実家の所在地)に付いていきなさい」、「やっぱり、結婚した以上(夫に)ついていくのは普通でしょう」というアドバイスを母親から得たとしている(2015

年2月20日インタビュー)。ここでは自らの考えはひとまず置き、まずは夫の考えや行動を優先する夫唱婦隨の価値観が示され、個人的な考えよりも家族を優先させる家族主義的な価値観が示されているのである。

P6は母親から妻の立場についての具体的な規範や価値の伝達はなかったとしながらも、夫との関係をどのようにとらえるかについての考えを伝えられていた。

ない。でも、別にないわけではないですけど、「こうして」って言われたことはないです。例えば、お母さんはすごいお父さんを大切にするんですね。お母さんって、私たちよりもすごいお父さんに尽くすんですよ。そんなイメージがあって、そのときお母さんが言ったのは、「子どもっていつかは自分たちの家族をつくって、自分たちが家を出て、残るのは私とお父さんでしょう。だからお父さんを一番大切にしなきゃいけないだよ」って言われました。

(2015年6月26日インタビュー)

このようにP6の母親は、いずれ子どもは独立するとしてもパートナーとしての夫を第一とし妻がそれを支えることを良しとしており、間接的ながら父権主義的な価値観が示されている。

それでは娘は母から示される価値観をどのように受け止めているのだろうか。この点に関する娘たちの語りを見ると、親が示す価値観を一旦は肯定的に受け止めている姿勢も見受けられる。しかし娘は母の価値観の全てをそのまま引き受けているという訳ではなかった。娘として行うべきとされる弟妹の世話や通訳などの役割遂行とは別に、彼女たちは日ごろ母親から示される価値観や振る舞いを見る中で、親世代との関係性を第三者的な視点から捉え直していた。

そうした捉え直しには、二つの傾向がみられた。一つは親家族への一体化を志向する傾向であり、もう一つは親家族からの自立・独

立を志向する傾向である。そしてその志向性の分岐を促す契機となるのが、親世代夫婦の関係の変容である。

先に取り上げたP2とP6の場合、両親は婚姻関係を継続しており夫婦仲も安定していた。P2とP6は母親から示される家族主義的な価値観について、完全に賛成という態度は保留するものの、母親の価値観に理解を示し、将来的には両親との生活をどのように構築するかということを現実的な問題として捉えていた。すなわち、将来的な介護の問題も含めて親世代の生活のことを自らの世代の家族の問題として捉えており、それを実現するために他のきょうだいとどのように親夫婦の負担を分担するかといったことまで検討していることが表明されていた。

こうした一方で、親世代の夫婦関係が悪化し別居や離婚に至っている場合には、娘たちは親家族からは離脱し、独立する傾向を示している。

現在P4の両親は別居状態にあるが、彼女は両親が離婚調停を起こした際に母親側の日本語の書類作成を引き受けざるを得なかった。彼女は父親側の事情や立場も知りうる立場にありつつも、母親側の立場に立って書類作成をしなければならず、こうした作業は親夫婦に対してきわめて複雑な心情をもたらすこととなった。現在は両親に対して「少し引く」立場にあり中立的に見守っている状態であるという。さらにP4は母親から「女だから家の中にいなきゃいけないとかっていうわけではなくて、やっぱり対等な関係をつくれるようにしないと」とか、「必ず、絶対に、ただ、旦那に従順になるというのではなくて、ちゃんと対等な関係じゃないと」言われていたという。それ故に、専門学校卒業後、職業資格を得た彼女は今や家庭に入る必要性を感じていない。「結局、私はちゃんと資格で働いているようなもの、当然、自分にもスキルも立場もあるから、別に家に入る必要性はないって感じます」と答えている。

両親が離婚したP7は母親から伝えられた

価値観を強く否定し、母親を反面教師として捉え直している。彼女の母親は「女性は結婚後は家庭に入るべきだ」という価値観の持ち主で、女性には学問は必要ないと、P7の大学進学にも反対したという。

お母さんを見て、「私は、こうならない」。お母さんが言うには、「自分は自立できない。自分は経済的に力を持ってない。だから、お父さんに頼らざるを得ないから離婚できない」みたいなことを言っていて、「じゃあ、自分は、1人で生きていけるように、ちゃんと学歴をつけて、ちゃんとした所に就職して、自立しよう」と思ったし(中略)「女性は、こうあるべきだ」って言われて、「自分は、そういうことを子どもに言わないようにしよう」とか、親を見て、「こうはならない」というのが多かったです。

(P7、2015年7月4日インタビュー)

さらにP7の父親は「女だから勉強しないのは駄目」、「学歴がすべてじゃないけど学歴がないと始まらない」というメリトクラティックな価値観を持ち、P7を学習塾や英会話教室に通わせた。父母の価値観が全く対立する中で、P7は父の価値観を選択することとなった。

娘たちは親から課せられた家事役割を引き受けつつも、単にそれに盲目的にしたがっていたわけではなく、親たちが示す価値観を自律的にとらえなおし自らの生き方を捉えなおそうとしていた。それは親に敵対的な態度をとるということではなく、むしろ一定の距離を置いて独立するという方向を選択するように見受けられる。それは明確な役割逆転には至らないまでも、親への尊敬の態度を保ちつつも緩やかに親家族から離脱するという可能性を孕んでいる。

5. 学業達成を左右する要因—親の人的資本と子どもの社会関係資本

角替(同)において調査対象となったペルー系男性6名のうち大卒者は3名、専門学校卒は0名であるのに対して、今回の調査対象である女性7名のうち大卒者は2名、専門学校卒は4名であった。大卒者の数こそ少ないものの、専門学校卒の女性の内3名は職業資格を取得し、経済的自立を果たしている。その意味では男性と遜色ない達成を果たしていると言えるだろう。女性は男性と比べてより多くの家事役割も担いつつも、学業達成を成し遂げているという点に着目したい。

こうした達成が可能となった要因として考えられるのは、一つには親世代の人的資本である。大卒である2名のうち、P6は両親ともにペルーの大学を卒業したうえで弁護士資格を取得し法律家として活動していた。P7の父親もペルーで大学教育を経験しており、来日後も娘たちに対して学歴の重要性を説いていた。また専門卒のP4は父親から大学への進学を強く勧められていた経験を語っている。学業達成を意識するきっかけとなっているのは親世代の学歴に対するメリトクラティックな価値観によるものが大きいと考えられる。しかし教育達成への達成願望は親世代(特に父親)の人的資本によるところが大きいとしても、その具体的な達成に関しては、家族以外の場において支援が得られるか否かが大きな要因となっている。

前節において見たとおり、彼女たちのエスニック・コミュニティとの関わりはそれほど強いものではなかった。こうしたコミュニティに代わり、彼女たちの達成を支えたのが職場や学校、さらには外国人支援団体であると思われる。そこで彼女たちが得たのは、進学するための具体的な知識や学力というよりも、進路選択に対する考え方(P4)であり、人間的に支えられているという感覚(P6)であった。

例えばP4は進路選択に当たっての基本的な考え方について、外国人支援団体から受けた影響を非常に高く評価し、親からの影響だけでは現実的な進路選択が不可能であったろうと語っている。

「ばいミー」*の存在とか、Aさん(日本人)は、自分の進路を決めていくうえでやっぱり影響はすごくありました。そこは結構大切だったというか、自分がこういうふう就職できたのも、多分それがあっていうのは今でも感じます。

(P4、2015年6月2日インタビュー)

高校時代に病気による長期欠席で卒業が危ぶまれたP6は高校の教員が彼女の成績だけでなく日頃の生活や人間的な部分も評価したうえで卒業させてくれたと語る。

成績だけで判断するのではなくて、そのときの私を理解してくれていたのかな。頑張っていたからこういうふうになったのかもしれないし、で、きっちり成績だけを見て卒業させたのではなくて、私を見て卒業させてくれたんだなって。

(P6、2015年6月26日インタビュー)

以上のように、ペルー系女性二世世代の学業達成を促す要因には二つの要因が関わっていると考えられる。一次的には親の人的資本である。親の学歴と学歴に対する価値づけが娘の教育達成への達成願望を突き付ける役割を果たしている。しかし娘の教育達成の実現は、それを可能とする支援を得られるかどうかによって左右されると考えられる。すなわち、支援を受けられるだけの社会関係資本を家庭とエスニック・コミュニティ以外の場で構築できるかどうかにより大きく影響されると考えられる。学校において彼女たちの存在に気づき彼女たちが何を求めているかを受け止める教員の存在は特に影響が大きいと思われる。そして支援に当たる教員や支援関係者が、彼

女たちに学業達成に必要とされる「学力」だけを与えていたのではなく、進路選択や職業選択の方法や考え方、将来への展望など、彼女たちが自律的に生活の見通しを立てていくうえで必要な問いかけを行っていた点にも注目したい。それは学校や支援団体がエスニック・コミュニティに代わる存在として機能しうる可能性を示すからである。

6. 役割逆転に至る可能性

ポルテスら (Portes & Rumbaut, 2001) は、各世代の言語習得とエスニック・コミュニティへの参加の組み合わせから4つの文化変容のタイプを示しながら、親世代と子世代の言語・習慣の獲得とエスニック・コミュニティへの所属について、世代間に相違が生じた際に「不協和型文化変容 (dissonant acculturation)」が生じると指摘する (pp.53-54)。

親世代と比較して子世代の方が早く英語を獲得し、かつ、子世代がエスニック・コミュニティに所属しない場合には、家族の絆が崩壊し子世代はエスニック・コミュニティを放棄し、さらに子世代が英語モノリンガルかセミリンガルになる可能性を孕むとする。(不協和型文化変容(1))。また、子世代の方が英語の獲得が早いうえに、親世代も子世代もエスニック・コミュニティに所属しない場合は、親の権威の喪失や親子の役割逆転と世代間の葛藤が生じるとしている。(不協和型文化変容(2))。

本研究で検討したペルー系第二世代の女性について世代間の言語獲得の違いやエスニック・コミュニティとのかかわり方に注目するならば、すべてのケースにおいて親世代よりも子世代の方が日本語の獲得が早く行われており、在日ペルー人コミュニティとの関わり方やペルー人に対する見方についても大きな差がみられ、子世代の方がコミュニティに対して距離を置いていた。こうした状況をポルテスらが示すモデルと対比させた場合、「不協和型文化変容」のいずれかに該当するよう

にも思われる。しかしながら、モデルが示すところの「家族の絆の崩壊」や明確な「役割逆転」といった状況は認めがたかった。

「家族の絆の崩壊」や「役割逆転」に至らない要因として仮説的に考えられるのは、家族主義的価値観が非常に強く保持されているために、親の権威が保たれ「崩壊」に至らない可能性である。しかしながら親世代の夫婦関係が不安定化した場合には、娘の親に対する見方がより第三者的になっていることを考慮するならば、今後親世代の高齢化に伴って、親子関係が変化しうる可能性が十分にあると思われる。

今回の調査対象者の親はほとんどが経済的に自立しているために、親の権威も一定程度保たれたままであった。こうした世代間の関係が今後親世代の高齢化に伴ってどのように変化するのか継続的に注目する必要があると思われる。

*「ばいみー」とは、神奈川県管いちょう団地で活動する外国人の当事者団体「すたんどばいみー」のことである。詳細は、清水陸美・すたんどばいみー (2009) を参照のこと。

【参考文献】

- Crockett, L.J., & Russell, S.T. 2013. "Latino Adolescents' Understanding of Good Parent-Adolescent Relationships: Common Themes and Subtle Differences", Chuang & Tamis eds. "Gender Roles in Immigrant Families. New York: Springer, pp.81-102.
- Espiritu, Y.L. 2003. Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries. Berkeley: University of California Press.
- 伊藤るり 1995 「ジェンダー・階級・民族の相互関係－移住女性の状況をひとつの手がかりとして」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学 ジェンダーの社会学』岩波書店、

pp.209-226。

Portes, A., & Rumbaut, R.G. 2001. Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation. Berkeley: Russell Sage Foundation.

清水陸美 2006『ニューカマーの子どもたち —学校と家族の間の日常世界』勁草書房。

角替弘規 2015「南米にルーツを持つニューカマー二世代の青年期」『桐蔭論叢』第32号 桐蔭横浜大学、pp.29-36。

* 本研究は平成27年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「ニューカマー二世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成にかかわる総合的調査」(課題番号26285193 研究代表者:角替弘規)による研究成果の一部である。